



アーティスト・荒神明香氏による「コンタクトレンズ」、大小619個のレンズで構成される。レンズは壁を穿んで映すため、会場がまるで窓あふきの様相を演出し、観客から見たような風景となる。



【展覧】アートがくちくちを斬り裂いて…これからの“感じ”がテーマ  
 企画: 2011年10月から今年15日まで、東京都現代美術館で「建築・アートがつくり出す環境—これからの“感じ”—」展が開催されている。展覧会には、建築や空間ととりまく状況が変化の中で、未来における空間と人・社会とのかわり方のヒントとなるような実践や試みを行う14か国28組の建築家とアーティストが参加。会場には従来の建築展のような模型やドローイングだけでなく、彫刻、映像、写真、インスタレーションなどさまざまな方法で“新しい環境”や“これからの感じ”を表現した作品が展示された。キュレーションは、東京都現代美術館チーフキュレーターの長谷川祐子氏と、林島和世氏、西沢立衛氏のSANAAが共同で手掛けている。両者は林島氏が総合ディレクターを務めた2010年秋のベネチア・ビエンナーレ国際建築展でも協働（長谷川氏、西沢氏はアドバイザーとして参加）。「People meet in architecture」をテーマに、林島氏の提案で、建築家だけでなくアーティストやエンジニアなども多数参加した。本展でもベネチアに出版した建築家やアーティストが一部参加している。

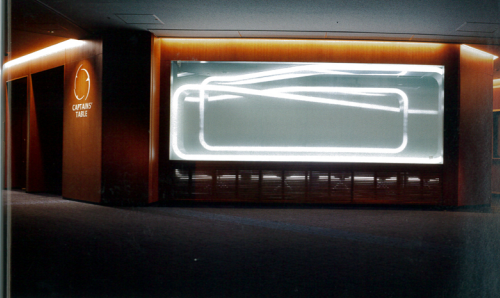
上/マドリッドを拠点に活動する建築家集団・AMO・Cescaによる展示。パリ建築大学のイベントのために計画されたバルーン型のパビリオン「ゴールドドーム」のスタディのプロモットと、巨大な模型が並ぶ、下/アジェリア在住のアーティスト、エム・オナツイ氏による作品「オーデション・ホーム」、ワインボトルの粒を包みかきカーブの、金属製材料に集った10の作品

## 取材ノート

今年2011年10月から今年15日まで、東京都現代美術館で「建築・アートがつくり出す環境—これからの“感じ”—」展が開催されている。展覧会には、建築や空間ととりまく状況が変化の中で、未来における空間と人・社会とのかわり方のヒントとなるような実践や試みを行う14か国28組の建築家とアーティストが参加。会場には従来の建築展のような模型やドローイングだけでなく、彫刻、映像、写真、インスタレーションなどさまざまな方法で“新しい環境”や“これからの感じ”を表現した作品が展示された。キュレーションは、東京都現代美術館チーフキュレーターの長谷川祐子氏と、林島和世氏、西沢立衛氏のSANAAが共同で手掛けている。両者は林島氏が総合ディレクターを務めた2010年秋のベネチア・ビエンナーレ国際建築展でも協働（長谷川氏、西沢氏はアドバイザーとして参加）。「People meet in architecture」をテーマに、林島氏の提案で、建築家だけでなくアーティストやエンジニアなども多数参加した。本展でもベネチアに出版した建築家やアーティストが一部参加している。

今回の展覧会は東京都現代美術館にとって2007年 年に「SPACE FOR YOUR FUTURE. アートと道徳を結び替える」以来の「空間」をテーマにした大型企画展となる。[21世紀の身体を包む環境や空間]という切り口で、横断的断片的に建築やアクション、アートなどのクリエイターが参加した前回同様、空間に対するさまざまな視点からの解釈や表現を見られる一方で、「空間」や「環境」というキーワードが、建築だけでなくアートやエンジニアリングなどの分野においても共有され、彼らによって言葉では言い表せない「これからの“感じ”」として表現された作品から、空間の未来の姿を垣間見られる展示となった。（編集部）

【展覧】アートがくちくちを斬り裂いて…これからの“感じ”がテーマ  
 企画: 2011年10月から今年15日まで、東京都現代美術館で「建築・アートがつくり出す環境—これからの“感じ”—」展が開催されている。展覧会には、建築や空間ととりまく状況が変化の中で、未来における空間と人・社会とのかわり方のヒントとなるような実践や試みを行う14か国28組の建築家とアーティストが参加。会場には従来の建築展のような模型やドローイングだけでなく、彫刻、映像、写真、インスタレーションなどさまざまな方法で“新しい環境”や“これからの感じ”を表現した作品が展示された。キュレーションは、東京都現代美術館チーフキュレーターの長谷川祐子氏と、林島和世氏、西沢立衛氏のSANAAが共同で手掛けている。両者は林島氏が総合ディレクターを務めた2010年秋のベネチア・ビエンナーレ国際建築展でも協働（長谷川氏、西沢氏はアドバイザーとして参加）。「People meet in architecture」をテーマに、林島氏の提案で、建築家だけでなくアーティストやエンジニアなども多数参加した。本展でもベネチアに出版した建築家やアーティストが一部参加している。



光の帯が縦横に走る空港内喫煙スペース

## LOOP

東京国際空港第1旅客ターミナルビル CAPTAINS' TOKYO内喫煙室

Tokyo International Airport International Passenger Terminal 1 CAPTAIN'S TOKYO SMOKING SPACE Tokyo  
 Designer TAKATO TAGAMAGI ARCHITECTURAL DESIGN

設計/タカタマガミデザイン 玉上貴人、金子成徳  
 施工/丹良社  
 撮影/吉村昌也

### 一筆書きの光の帯

扉開口の目前に位置するこの部屋に純々として旅客が入って来く。出発前のわずかな時間を惜しむかのように心無しが音小走りだ。空港の試算によれば1時間1500人がこの部屋を利用するという。

羽田空港第1ターミナル出発ラウンジ商業エリア「CAPTAINS' TOKYO」の一角にこの特徴的なカウンターを持つ喫煙スペースはある。カウンターはその壁途に並び高さが決まら

れる。食事のためのカウンター高さは落ちない。バーのカウンターはバーテンダーと客の視線が合うように高さを持たせると、ところが喫煙のカウンターにはこれだけという高さが無い。市販の既製品スタンドの高さがそのままではあるように、なぜかを持った手が縦向きに届くにはばばりに設定された。ならばそれを意匠にできないかと考えた。旅客側の視線のごとく高度、速度を変化させながら動いている様を一筆書きの光の帯

外観。この喫煙スペースは、羽田空港1旅客ターミナル内オープンした商業エリア「CAPTAINS' TOKYO」の敷地エリアである「CAPTAINS' TARI」の一部に設計された。LEDを内蔵したカウンターの光の帯が、ガラス面に映られたシート越しにぼんやりと浮かび上がる

【LOOP(ループ)として表現した。LOOPの水平面の高さはさまざまに変化する。床面から400mmの高さの面はテール部のバンドとして、900mm、1100mmの部分はスタンダードのカウンターとして機能する。LOOPは壁面に張り込み、遅延しがちな空間に広がりをもたらす。旅人はここで光の帯を目で追いつかの間、シャトルリブに浸る。そしてまた小走りになって行く。（玉上貴人/タカタマガミデザイン）